

サンプル

Episode 1

彼の住む二階建ての1Kアパート。

遮光性もさほど良くない、ひとり暮らしを始めた頃から使っているらしいカーテンの隙間から、街灯の光が薄暗い部屋を頼りなく照らしていた。

シーツの擦れる音と、重なり合う吐息。

敦に抱き寄せられながら、私はふと、テーブルの上に置いた婚約指輪へ視線を向ける。小さなダイヤが、祝福というより、

これから始まる現実を静かに告げるみたいに、ひんやりと光っていた。

『くるみ……愛してるよ』

その言葉に胸が温くなるのに、

同時に、なぜか少しだけ、息が詰まる。

幸せなはずなのに――

どうしてこんなに、心が揺れるんだろう。

敦が重なり、舌先がぬるりと入り込んでくる。腰を揺らす彼のリズムに合わせて、部屋には水音がクチャクチャと無遠慮に響いた。

『くるみは？』

『……』

『……敦…ねえ？ もっと深く挿れて……？』

『本当にエロいなあ…じゃあ、脚あげるよ？』

促されるまま膝を上げて彼をより深い場所へと招き入れた。

『…ん。』

彼はいつものように、心から気持ち良さそうに私を求めている……けど私は……

『ん…はあ』

そんな彼の表情を眺めながら、私の心のどこかには拭いきれないマンネリ感が漂っていた。

『はあはあ……俺ダメ……俺もう……イキそうだ……あ——っ……イクイクイクッ』

—Episode3

『はは、道理でスタイルええわけやな』

柔らかな胸を大きな手で包み込み、指先で執拗に愛撫され、私は快感のあまり腰を浮かせた。

『ダメ……変になりそう……あ♡あんっ……！』

唇を塞がれ、そのまま下腹部の奥へと長い指が忍び込む。

『あ……！ あっ、あっ……！』

指先が秘部を割り、粘膜を擦る艶やかな水音が寝室に響き渡る。

クチュクチュ……

奏真専務は一瞬唇を離すと、意地悪なほどに美しい微笑みを浮かべた。

『もっと可愛ええ声で喘ぎ？ ほら、聴かせてや』

涙目で彼を見つめると彼はスッと起き上がりTシャツを脱ぎ捨てた。

露わになったのは、美しく引き締まった身体。

程よい筋肉の躍動と、綺麗に割れた腹筋に、私は思わず息を呑んだ。

奏真は指先でそっと開き、

敏感なクリトリスを舌先で転がしながら軽く舐める

チュウッ……

『あ……っあん……♡あ』

焦らすように、舌先で舐め、時には唇で軽く吸い、決して本気で与えず、ただじわじわと火を灯すだ

け。奏真は濡れた唇を離し、くるみの瞳をまっすぐ見つめて顔を上げた。指先はまだ熱い蜜を纏ったまま、ゆっくりとその奥へと指を沈んでいく。

くちゅ……と小さな水音が響くたび、くるみの背が弓なりに反った。

指先が二本に増え、奥を抉るような刺激に、私は生まれて初めての感覚に支配される。

『すごく気持ちいい……あっ……いきそう、あっ、ダメ、いくっ……！』

—Episode4

敦が必死に言葉を紡いでいるその影で、専務の指先はスカートの奥深くへとスーッと侵入していた。

専務は前方に視線を固定したまま、まるで何事もなかったかのように資料をめくるふりをする。

でも、その右手はゆっくりと、私のスカートの下へ滑り込んでいく。

パンストの薄い生地越しに、指の腹が内ももをなぞる。

ゆっくり……意図的に……まるで時間をかけて味わうように。

（ん……っ）

小さな息が溢れて慌てて唇を噛む。

隣の席で、専務の口角がわずかに上がるのが見えた。

クスッ……と、喉の奥で低く笑う気配。

敦がスライドを切り替えて、こちらを向く。

真っ直ぐな瞳が私を捉える瞬間、専務の指が下着の縁をくぐり抜け、直接肌に触れた。

（あ……っ！）

熱い指先が、割れ目を優しく、でも確実になぞる。

布地を押し込むように、中心の敏感な突起を探り当てて……軽く、円を描く。

クチュ……。

小さな水音が、自分の耳にだけ聞こえる。

体がビクッと震えて、膝が勝手に閉じそうになるのを、専務のもう片方の手が膝頭で押さえてくる。

「脚、開いておき」

耳元で、囁くような声。誰にも聞こえない、専務だけの声……指がさらに奥へ。

下着をずらして、直接蜜に触れる。

ヌルッ……と滑る感触に、思考が溶けていく。

敦のプレゼンが佳境に入り、声が大きくなっている。

その声に紛れて、専務の指が中へ一本、ゆっくり沈められる。

「あ……っ！」

